

富士吉田あれこれ

女の節供

3月3日は、雛祭りの行事が各地でおこなわれています。雛壇に美しい人形を飾り付け、菱餅・白酒・アラレなどを供えてお祝します。この雛祭りは、古代におこなわれていた祓いの行事がもとになっていると考えられています。3月3日の雛祭りのことを上巳の節供とも呼んでいます。上巳は本来3月最初の巳の日という意味で、中国ではこの日水辺に出て飲酒し、不浄を祓う行事が行われていました。これを「上巳の祓」といい、奈良時代に日本に伝えられ、3月3日の行事として行われるようになりました。

祓いの行事では、古くは「人形(ヒトガタ)」を作って自分の身体を撫でて、穢れや悪いものを移す身代わりとし、それを川に流すことが行われていました。このヒトガタが後に川や海に棄てられるものだけでなく、保存され美しく飾られるようにもなり、それが雛人形へと発展して3月3日に雛人形を飾るようになったといわれています。

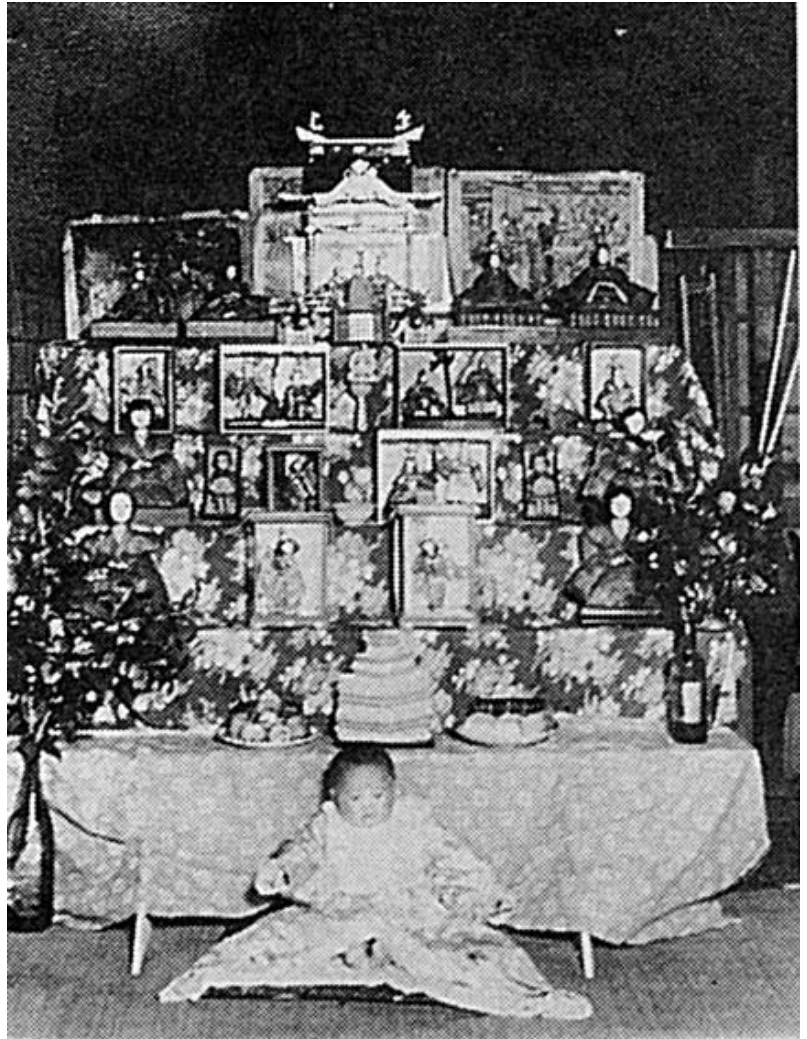
このように雛祭りは「上巳の祓」を基にして成立しましたが、その根底には古くから日本に伝わる人形を用いた祓いの思想が残されています。そして、このようなヒトガタがもとになって、雛人形というかたちに発展

していき、雛人形を飾ることによって子供の健やかな成長を願う行事として全国的に定着していったのです。

雛祭りは、地方によって祭りの内容もさまざまな特色がみられますが、市域では雛祭りのことを「桃の節供」とか「女の節供」といい、一般には月遅れの4月3日に行っています。そして女の子のお祭りであるとともに婚姻習俗とも関わりがある行事でした。

女の子のいる家では、座敷に雛人形を飾り、菱餅・白酒・巻寿司などを供えます。特に菱餅は欠かせないもので、白餅と食紅で染めた赤餅、ヨモギをまぜた草餅の3色の餅を重ねて作りました。また、嫁いで最初の年の雛祭りは、「嫁節供」といって、おもに嫁の実家や仲人などから「高砂の人形」が贈られます。これは未永く共に白髪の生えるまで仲良く暮らすようにと縁起を担いで贈られるものです。

また、子供が生まれて初めて迎える節供のことを「初節供」といいます。初節供には、里方・親戚・知人などから男子には5月5日の端午の日に武者人形



市内の雛飾り / 昭和中期

や鯉幟が、女子には3月3日の雛祭りに雛人形や雛道具が贈られ、子供の健やかな成長と幸福を祝います。特に女子の初節供には、内裏雛のほかに「オボコサマ」と呼ばれる御所人形や「スワリデク」と呼ばれる祓人形が贈られました。これらの人形は、出産を祝う習俗によるものでもあり、古くから魔除けとして新生児の枕もとに置かれた「天児」や「這子」と呼ばれる祓いの人形に由来するものと思われる。

このように雛人形のほかに雛壇には、婚姻や出産を祝うものとして「高砂の人形」や「オボ

コサマ」なども飾り、雛壇を飾った部屋の壁には、三月絵という華やかな紙絵の掛軸をたくさん吊るし賑やかに飾り付けていました。

市域では、雛人形は早く出して早くしまうものだといい、遅くまで飾っていると娘の結婚が遅くなるといいます。また、人形は必ず飾るもので、出さないと人形が泣くともいわれています。そして、女の子が生まれた初節供には、親戚や仲人などを招いて祝宴を催し、特に長女の初節供には盛大にお祝いをしました。

(布施光敏)

◆レポート
食行身禄の生家を訪ねて

身禄の生家を訪ねて

はじめに

博物館では平成20年11月8日から、「身禄の聖物」と題する企画展を開催しました。この企画展は江戸時代の富士山の行者、食行身禄の遺品を展示したものです。身禄は享保18年(1733)に富士山の七合五勺で断食して入定しました。この行為がセンセーショナルだったため、富士山へ登山する人たちが爆発的に増えたといわれます。身禄は生前、自分のことを人を超えた存在である「身禄菩薩」と称していました。死後は、その意図の通り、富士山を信仰する人たちに神や仏のように神聖

視され、その遺品も信仰の対象となりました。富士山で修行に励んだ身禄の遺品は、富士吉田市内に数多く残っています。

そんな身禄ですが、本名は伊藤伊兵衛といい、伊勢の一志郡清水村の出身、今の三重県津市(旧一志郡美杉村)の生まれです。身禄の生まれた家は、家屋こそ建て直されていますが、現在も同じ場所に残り、伊藤家の子孫は長く身禄を信仰する人たちを迎えてきました。博物館では、身禄の企画展を開催するに当たって、三重県津市に残る身禄の生家を尋ねました。



■食行身禄像

旧美杉村川上

身禄の生まれた旧美杉村(津市)は三重県の県庁所在地、津市の中心部から、車で数時間ほど



■身禄の生家

走ったところにあります。かつて美杉村から伊勢神宮へ外院の檜皮と樽を運搬したという雲出川を上流まで遡り、美しい杉林に囲まれた溪谷の中にあります。交通機関は久居美杉線という単線の電車が有り、その終点の八幡で降り、徒歩で数十分かけてさらに登っていきます。

現在、旧美杉村は山深い山村という印象ですが、古代から中近世には奈良の初瀬から伊勢に至る初瀬(伊勢)本街道が通っている交通の要衝で、近くの多気郡には伊勢の国司であった北畠氏が城館を造り勢力伸展の拠点としました。北畠氏の勢力が衰えた後も、江戸時代の初瀬本街道は、畿内・大和地方の人々が伊勢神宮へお参りする主要な道として賑わいました。しかし、近代になり交通機関が発達して以降は、元のように林業で生計を立てる静かな山村へと戻りました。

身禄の生家

身禄の生家は、美杉村も「川上」と呼ばれる雲出川の支流の上流部にあります。生家には、富士信仰の研究者によって奉納された、「富士講元祖食行身禄術生誕之地」と刻まれた石碑がひっそり立っています。子孫の暮らすその家には、今でもよく富士講の研究者や富士を信仰する方々が訪れるそうですが、もう富士山の祭壇を設けることもなく、当家の所有していた身禄や富士山の関係の古文書は三重県に移管してあります。身禄の実家が、元々富士山への信仰をもっていた家なのかどうかは、定かではありません。しかし、身禄という人物を出したことで、次第に富士信仰の中心部へ関わっていったようです。



■身禄の石碑

身禄の産湯の井

身禄の生家に北面する坂本川の辺には、「身禄の産湯の井」と伝承される湧き水があります。現在はそれほどの水量はなく、人工的な管から水を落としている様子ですが、この水は富士講の信者にとっては神聖な水でした。鳩ヶ谷(埼玉県)の富士の行者、小谷三志は、わざわざこの水を硯にとって教書を書き、弟子は身禄の生家の所有する文書を書き写したそうです。そばの坂本川に架かる橋はミロク橋と名づけられておりました。

(高橋晶子)

- 参考文献
- 岩科小一郎
- 「富士講の歴史」1983年
- 平凡社
- 「三重県の地名」1983年



■産湯の井



■工事中のミロク橋

文化財だより

県指定文化財のお知らせ

北口本宮富士浅間神社の拝殿及び幣殿が平成21年2月16日付けで県指定有形文化財(建造物)に指定されました。すでに国指定重要文化財に指定されている本殿とともに元和元年(1615)に郡内領主鳥居土佐守成次によって造営されたものです。江戸時代に編纂された地誌「甲斐国志」によると「本殿(中略)元和元年鳥居土佐守ノ再建」とあり、「幣殿梁三間二尺桁二丈八尺、拝殿中央

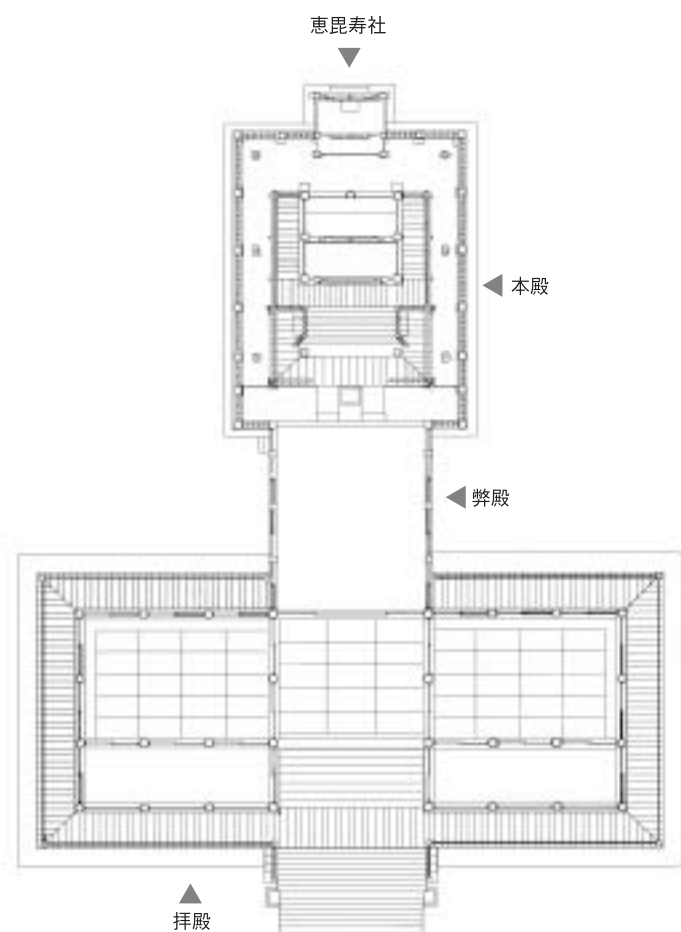
間梁三間二尺桁二丈七尺、両脇間梁桁各二丈七尺、元和元年本殿ト共ニ造営」と記されています。その後、富士講の支援を受けて享保18年(1733)から十数年かけて大規模な修復工事がおこなわれ、現在の社殿と境内地に整備されました。浅間神社は吉田口(北口)登山道の基点であり、富士山の歴史を語る上でも重要な拠点であり、世界遺産の構成資産に欠かせない文化財といえます。

●指定名称

北口本宮富士浅間神社拝殿および幣殿 1棟 附石垣・本殿瑞垣および恵毘寿社



■北口本宮富士浅間神社拝殿



■幣拝殿・本殿平面図



■北口本宮富士浅間神社本殿 (国指定重要文化財)



■北口本宮富士浅間神社東宮本殿 (国指定重要文化財)



■北口本宮富士浅間神社西宮本殿 (国指定重要文化財)

四季の展示～小正月のダンゴバラ

小正月のダンゴバラ

博物館では、四季折々にあわせて、この地域につたえられてきた習俗を附属施設の農家などで展示しています。平成21年1月には、15日を中心とした小正月の行事として「ダンゴバラ」を製作しました。ダンゴバラとは、米の粉で作った「メーダマ」、「マイダマ」と呼ばれる団子を山から伐ってきた榎・栗・ヤマッカ(山桑)・ミズフサ(ミズキ)などの木の枝に刺して飾ったものです。土台となる木はいろいろありますが、特にヤマッカは蚕を生育するのに欠かせないもので、「蚕が山ほど取れる」など織物が大きな産業であったことに起因して縁起を担いだものといえます。また、栗の木は、「資金の繰り回しがよい」、ミズフサは火防せになるなどとされていました。

メーダマは、米粉を湯で練り、団子状に丸めて茹で上げて作ります。団子の茹で汁は、家の周囲に撒き、こうすることで蛇が家の中に入ってこないとされていました。この団子作りは、通常13日の朝に行われています。メーダマは、丸い形のほかに豊蚕・豊作祈願の意味を込めて繭や俵の形に丸めて作

ったり、その他、縁起を担いでいろいろな形のメーダマを作って飾ったものでした。また、形だけではなく、食紅で赤くそめた団子で紅白にしたり、キビやモロコシの粉で作った黄色い団子やミカンを刺して色とりどりの飾り付けを行いました。

団子は、小正月期間の夜におこなわれる「ドンドン焼き」に持って行き、焼いて食べると風邪をひかないとか虫菌にならないといわれていました。16日を過ぎてダンゴバラを片付けると、取り外したメーダマは味噌汁に入れたり、砂糖醤油で煮て食べたりしました。



■メーダマ作り



■メーダマ



■ダンゴバラ



■釜でメーダマを茹でる



■ダンゴバラの飾り付け

月江寺学術調査報告

月江寺学術調査報告

はじめに

水上山月江寺は、市内下吉田の臨済宗妙心寺派の古刹です。『甲斐国志』によると、かつては天台宗で称光院と称しましたが廃絶し、『寺記』によると応永2年(1395)に禅僧の絶学祖能によって臨済宗向嶽寺派の寺院として再興され、今の月江寺が整いました。その後、寛永年間(1624-44)には妙心寺派に転じますが、江戸期には末寺20ヶ寺を越える、富士山北麓では最大規模の寺院として発展しました。

また、明治時代に入るまで、下吉田の現小室浅間神社の別当職を勤め、富士山の信仰との関わりも深い寺でした。月江寺では平成18年度から、独自に文化財調査に着手し、博物館も調査協力しています。

月江寺にはすでに市指定文化財の頂相図(僧侶の肖像画)が数点ありますが、今回の調査過程では、さらに多くの貴重な資料の存在を明らかにすることができましたので、その一部を紹介します。



■月江寺本堂

富士信仰と月江寺

現在、市内上吉田の北口本宮富士浅間神社の参道のなかほどに仁王門跡とされる場所があります。道の両側に、門の礎石が残っているだけですが、かつては門があり、中に月江寺が管理する仁王の像が1対祀られていました。仁王というのは、東大寺の南大門などに置かれている

ものが代表的な仏像ですが、本来、お寺に祀られるものであることから、神社内にあるのは不自然な気がします。しかし、明治時代に神仏分離令が発令されるまで、日本各所の神社は神仏習合とあって、仏と神が同じものであるという思想の中にありました。神社の中に仏像が祀ら

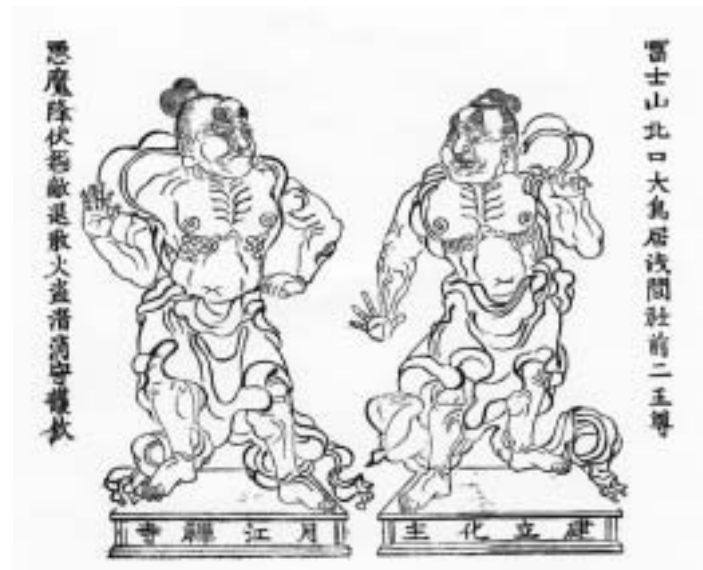
れることも決しておかしいことではなかったのです。

浅間神社の仁王像は、明治の神仏分離令の際、廃仏毀釈という世の中の動きにあわせ、壊されてしまったため、現存はしていません。しかし、今回、仁王像を管理していた月江寺で、仁王の姿を表わした版木が発見さ

れました。この版木から、当時の仁王像の姿をしのぶことができます。また、月江寺と富士山の信仰との深い関わりも示している貴重な資料といえます。



■浅間神社仁王門礎石



■浅間神社仁王像



■仏涅槃図

県内最古級の仏涅槃図

仏涅槃図は、お釈迦さまが亡くなる時、横たわる釈迦を囲んで仏や弟子や動物が嘆き悲しむ様子を描いた絵画です。お釈迦さまが亡くなった2月15日の涅槃会に掲げられ、ご供養されます。涅槃会はお釈迦さまの法事ということです。仏涅槃図は宗派、時代を問わず製作されるものですが、月江寺の仏涅槃図は、下地となる絹の幅が狭く、

それを接いで大きな画面になっている点や慶長9年(1604)補修の裏書きから、月江寺再興の14世紀末の製作と考えられます。山梨県では最古級であり、かつ痛んだ箇所もほとんど無い貴重な仏涅槃図です。また中世の絵画らしく落ち着いた色合いですが、仏たちの衣服の截金紋様(切った金箔を貼って作る模様)は華やかな印象です。

京都の仏師製作の観音菩薩坐像

月江寺で古い本尊と伝えられる仏像は、手に蓮の花をもっている観音の坐像です。観音菩薩は釈迦如来について、禅宗の寺に多く祀られている本尊です。この観音菩薩坐像は木造で、体の幹部を2つの木材から造り、内部は削り抜いて中空になっています。そして体内の中央に縦に束を作り、さらに前後の木材を2つの束を造ってつなげるという特殊な構造であり、「院派」と呼ばれる京都の仏師集団の制作と考えられます。院派はこの構造のほかにずんぐりした体躯、面長な顔、厳しい表情などの表現の特徴がみられますが、まさにこの観音菩

薩像に当てはまっています。この像は14世紀末の製作と考えられます。ちょうどその頃、県内では禅宗寺院を中心に院派の作品が多く残されています。



■木造観音菩薩坐像内部



■木造観音菩薩坐像

■月江寺展開催のお知らせ

博物館では、月江寺の貴重な文化財をお借りし、平成21年9月19日～11月23日まで「月江寺展」と題して企画展を行う予定です。



博物館からのお知らせ

●新刊案内



『富士の神仏
— 吉田口登山道の彫像 —』
平成 20 年企画展図録
A 4 版 / 78 頁 / 380 円
価格：1,000 円

▶ かつて富士山内に数多く奉納されていた仏像は、近代に入って神仏分離により、その多くが壊され、或いは山より降ろされてしまいました。この図録では、里に降ろされて難を逃れた仏像を集成し紹介しています。



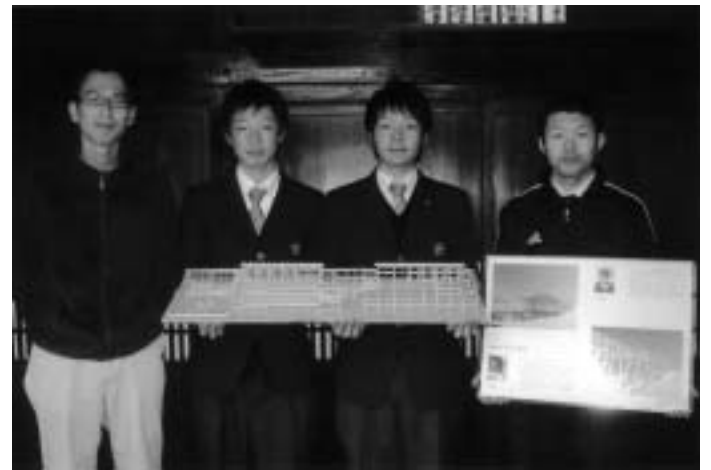
『身禄の聖物
— 田辺近江家資料を中心に —』
平成 20 年企画展図録
A 4 版 / 59 頁 / 280 円
価格：1,000 円

▶ 吉田口の御師、田辺近江家に伝えられた富士講中興の祖とも称される食行身禄とその弟子である田辺十郎衛門の遺品類を中心に紹介しています。

●外川家住宅の模型寄贈

北富士北稜高校の生徒より県指定文化財旧外川家住宅の軸組模型が寄贈されました。模型は外川家住宅の図面や資料を参考にして柱や梁、屋根を 3×3mm の角材を用いて 1/50 縮尺で製作されています。製作にあたっ

た志村君・渡辺君の 2 名は、「昔の建物の構造や特徴を知ることができ、現在とは柱や梁の数など構造的に違いがあることがわかった」と模型製作を通して御師の家の歴史に興味を持ったとのことでした。



富士吉田市歴史民俗博物館 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間 / 午前 9:30～午後 5:00 (午後 4:30 迄入館可)
休館日 / 火曜日(祝日を除く)、
祝日の翌日(日曜・祝日を除く)、年末年始
観覧料 / 大人 300 円 (団体 240 円)
小中高生 150 円 (団体 120 円)
交通案内 / ●中央自動車道河口湖 IC より車で 10 分
●東富士五湖道路山中湖 IC より車で 10 分
●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面
バス 15 分、サンパークふじ下車



博物館附属施設

御師 旧外川家住宅のご案内

〒 403-0005
山梨県富士吉田市上吉田 3 丁目 14-8
TEL 0555-22-1101
観覧料 / 大人 100 円 (団体 80 円)
小中高生 50 円 (団体 40 円)
※博物館・富士山レーダードーム館の
チケットで入館できます。

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとされています。

〒 403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 2288-1 TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665

博物館ホームページ URL ● <http://www.fy-museum.jp> E-mail ● hakubutsu@city.fujiyoshida.lg.jp

2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒 403-0005 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

発行 / 平成 21 年 3 月 31 日 印刷 / K2・ONE